

リスニングのテスト方法に関する研究 — 北海道における大学入試に焦点をあてて*

高 井 收 (小樽商科大学) 新 井 良 夫 (藤女子大学)
平 田 洋 子 (小樽商科大学) 河 合 靖 (北海道大学)
皆 川 治 恵 (北海道教育大学) 大 場 浩 正 (北海道医療大学)
Torkil Christensen (北星学園女子短期大学) 横 山 吉 樹 (北海道東海大学)

1. はじめに

大学入学試験にリスニング・テストの実施を求める声は以前から高く (小池, 1988), 高等学校のカリキュラムに新たに「オーラル・コミュニケーション」が導入されたことを期に, 多くの大学でリスニング・テストが実施されることになるだろうという予測ができる。全国大学英語教育学会 (JACET) 北海道支部に属する CCR (Classroom-Centered Research) 研究会では, ここ数年間, 大学の英語教育におけるリスニングの問題をテーマに研究活動を行ってきた。本研究会が北海道内 12 大学における 4 年目の学生を対象に行った, 大学英語教育の実態調査 (西堀他, 1993) の結果によると, 4 技能の中で, とりわけリスニング能力の必要性が明らかにされた。我々はこの結果に基づき, 大学の入試におけるリスニング・テストの実態を比較分析することを目標に研究を行っている。今回はリスニング・テストの問題を分析する評価基準表の作成と, 北海道内大学入試における 96 年度と 97 年度のリスニング・テストを比較分析することを目的とした。

学習者のリスニング能力を評価するテストの作成および, テストの評価には, リスニングにかかわる言語能力を含めたコミュニケーション能力, およびテスト方法など, その他の要因が特定化されなければならない。Bachman (1990: 165) は学習者が受けるテストの結果に影響を及ぼす, 次の 4 つの要素を定義している。(1)ランダム要因とはテストを受ける際の学習者の体調や, 精神状態などを指す。(2)個人的な要因とは年齢, 性別, 母語や文化背景など, 学習者一人一人によって異なる要因である。これらはテストを作成する際に我々がコントロールできない要素である。一方, 我々がコントロール出来る要素として(3)コミュニケーションのための言語能力 (CLA) と, (4)テスト方法 (TMF) を挙げている。コミュニケーションのための言語能力とは適切な言語使用能力のことで, 今回の研究の対象とはせず, 将来の研究課題とした。テスト方法とは, 出題形式などいかにテスト問題を提示するかということであり, その違いが学習者のテストの成績を大きく左右するので, 最も慎重に検討すべき問題である (Bachman, 1990: 113)。本研究ではテスト方法に焦点を絞り, その評価基準表を作成し, 北海道内 9 大学の大学入学試験を対象に調査, 分析を行った。特に, 高等学校に「オーラル・コミュニケーション」が導入された前後において, 大学入学試験のリスニング・テストの内容および形式が如何に変化したかを調査した。

2. 方 法

2.1. 調査対象

北海道内の 9 大学 (国立大学 3 校, 私立大学 5 校 (付属短大 2 校), および私立短大 1 校) の入試問題より, リスニング試験問題を抽出した。このうち 4 校は 97 年度より新たにリスニング問題が入試に付け加えられた大学のため, 97 年度入試の問題のみ, 残りの 5 校については 96 年と 97

年の問題およびテープを収集した。

各大学の出題形式について検討したところ、様々な出題形式が取られていることがわかった(資料1参照)。今回はそのなかで、出題が最も多く一番標準的と考えられる「内容把握多肢選択」問題を分析Aとして、その次に出題の多かった「Dictation」と「真偽判断」を分析Bとして抽出し、分析した。また、分析Aについては、問題文を散文と会話文に分けて分析した。

2.2. 評価基準表の項目と評価方法

Bachman (1990), Bachman et al. (1995) の出題形式および方法 (Test Method Facet, 以下 TMF) に関する評価基準を参考として、評価基準表を作成した。まず、市販の大学入試問題サンプルを用いて、TMF の項目が評価を進める上で妥当かどうか本研究会のメンバーで検討した。その上で、TMF の項目から必要なものを選び、本研究にあった評価基準表を作成した。次に、収集した大学入試問題の中から一つを選んで試験的に評価を行い、項目に微調整を加えた。

評価基準表の項目は以下のように定めた(資料2の項目欄参照。以下のかっこ内は評価基準表内での表示である)。テスト全体の構成 (Test Organization) では、問題間の区別が明確か (Salience of Parts), 問題が易しいものから順に提示されているか (Sequence of Parts) である。問題の指示 (Instructions) では、指示が日本語か英語か (Language), あるいは音声か文字か (Channel) である。問題文 (First Input: Passage) では、問題文の提示回数 (Number of Times of Presentation), 総語数 (Number of Words), 語彙の難易度 (Vocabulary)¹⁾, 問題文の話される速さ (Speech Rate)²⁾, 問題文の具体性/抽象性 (Type of Information), 話題が帰属する文化圏 (Native/Others/Target), 日常的な話題か学術的な話題か (Casual/Academic), 学習者に身近な話題か否か (Familiar/Unfamiliar), 話題が説明調か否か (Explanatory/Non-explanatory) である。質問文 (Second Input) では、音声か文字かによる提示の別 (Channel of Presentation), 提示回数 (Number of Times of Presentation), 総語数 (Number of Words), 語彙の難易度 (Vocabulary), 音声による場合の話される速さ (Speech Rate) である。選択肢 (Third Input, 真偽判断文を含む) では、音声か文字かによる提示の別 (Channel of Presentation), 提示回数 (Number of Presentation), フレーズか文か談話かによる長さの別 (Length), 語彙の難易度 (Vocabulary) である。

評価は、問題用紙を見ながら実際に試験に使用されたテープを聞いた上で、総語数や話される速さなど数量測定できる項目は測った数値を示し、「指示が日本語か英語か」と言った客観的な分類分けの項目は協議により分類を行い³⁾, それ以外の項目については7人の評価者が3段階(0~2)による主観的な評価を行ってその平均値を取った。なお、総語数および Speech Rate の値は、少数点以下を四捨五入した。

3. 結果と考察

3.1. 分析A (Test Organization/Instructions [General]) (資料2表1参照)

テスト全体の構造 (Test Organization) において、問題間の区別は、全体的に見て、明確であると言える(1.78)。しかし、H大学の出題形式は他大学とは異なり、各問題の区別がそれ程明確ではない。問題形式によって問題間の区別の明確さが変化するのかもしれない。また、問題の提示順序は、平均1.03であり、各大学ともあまり意識した出題(易から難の順)とはなっていないようである。特に、A大学の96年度前期においては、0.50であり、問題提示順序に関して再考す

資料1：リスニング・テスト出題形式・内容一覧表

大学	学部	年/期	問題 番号	分析 A	分析 B	出題形式分類	1st Input (問題文)	2nd Input (質問文)	3rd Input (選択肢・真偽文)	Output (解答方法)
(国立大学)										
A大学	全学	96年 前期	1 2	○	○	内容把握多肢選択 Dictation	散文(説明文) 全体として纏まった内容を5つ にわけて問題文とする	英語で内容を問う音声のみ NA	英語3択音声のみ NA	選択肢が読まれる毎に正誤に○ 全文書き取り
		96年 後期	1 2	○	○	内容把握多肢選択 Dictation	散文(説明文) 全体として纏まった内容を5つ にわけて問題文とする	英語で内容を問う音声のみ NA	英語3択音声のみ NA	選択肢が読まれる毎に正誤に○ 全文書き取り
		97年	1 2	○	○	内容把握多肢選択 Dictation	散文(説明文) 全体として纏まった内容を5つ にわけて問題文とする	英語で内容を問う音声のみ NA	英語3択音声のみ NA	選択肢が読まれる毎に正誤に○ 全文書き取り
B大学	中学 英語	96年	1 2 3		○ ○	定義文把握 真偽判断 Partial dictation	定義文 散文(物語文) 全体として纏まった内容に4箇 所書き取り部分を設定	NA NA NA	NA 英語1文の真偽判断文を10題 NA	日本語の単語 真偽文を各々真偽判断してTF 問題用紙の空白部分を書き取り
		97年	1 2 3		○	定義文把握 内容把握英問英答 Partial dictation	定義文 散文(説明文) 全体として纏まった内容に3箇 所書き取り部分を設定	NA 英語で内容を問う音声のみ NA	NA NA NA	日本語の単語 英語で解答 問題用紙の空白部分を書き取り
		C大学	文系	97年	1 2	○	内容把握空欄補充 内容把握多肢選択	会話文 散文(説明文)	NA 英語で内容を問う文字のみ	要約文 英語4択文字のみ
(私立大学)										
D大学	英文	97年	1 2	○ ○		内容把握多肢選択 内容把握多肢選択	会話文 散文(説明文)	英語で内容を問う音声のみ 英語で内容を問う音声のみ	英語4択文字のみ 英語4択文字のみ	記号 記号
E大学	人文	97年	1 2	○ ○		帰結判断多肢選択 内容把握多肢選択	英語1~2文の文脈設定文 会話文	英語で1st Inputをもとに類推 英語で内容を問う音声のみ	英語4択文字のみ 英語4択文字のみ	記号 記号
F大学	英語	96年	1 2	○ ○	○	真偽判断 内容把握多肢選択	散文(物語文) 会話文	NA 英語で内容を問う音声のみ NA	英語1文の真偽判断文を10題 英語4択文字のみ	真偽判断文から解答を5つ選び記号 記号
		露語	96年	1 2	○ ○	○	真偽判断 内容把握多肢選択	散文(説明文) 会話文	NA 英語で内容を問う音声のみ NA	英語1文の真偽判断文を10題 英語4択文字のみ
	英語	97年	1 2	○ ○	○	真偽判断 内容把握多肢選択	散文(説明文) 会話文	NA 英語で内容を問う音声のみ NA	英語1文の真偽判断文を10題 英語4択文字のみ	真偽判断文から解答を5つ選び記号 記号
		露語	97年	1 2	○ ○	○	真偽判断 内容把握多肢選択	散文(説明文) 会話文	NA 英語で内容を問う音声のみ NA	英語1文の真偽判断文を10題 英語4択文字のみ
G大学	英語	96年	1	○		内容把握多肢選択	会話文	英語で内容を問う音声のみ	英語5択文字のみ	記号
		97年	1	○		内容把握多肢選択	会話文	英語で内容を問う音声のみ	英語5択文字のみ	記号
		97年	2	○		内容把握多肢選択	会話文	英語で内容を問う音声のみ	英語5択文字のみ	記号
H大学	人文	97年	1 2	○		内容把握多肢選択 音声識別多肢選択	散文(説明文) 部分的会話文	英語で内容を問う音声のみ NA	英語3択音声のみ 英語3択音声のみ	記号 記号
(私立短大)										
D短大	英文	97年	1	○		内容把握多肢選択	会話文	英語で内容を問う音声のみ	英語4択文字のみ	記号
			2	○		内容把握多肢選択	散文(説明文)	英語で内容を問う音声のみ	英語4択文字のみ	記号
F短大	英文	96年	1	○		内容把握多肢選択	散文(説明文)	英語で内容を問う音声文字両方	英語3択文字のみ	記号
			2	○		内容把握多肢選択	会話文	英語で内容を問う音声文字両方	英語3択文字のみ	記号
	英文	97年	1	○		内容把握多肢選択	散文(説明文)	英語で内容を問う音声文字両方	英語3択文字のみ	記号
		2	○		内容把握多肢選択	会話文	英語で内容を問う音声文字両方	英語3択文字のみ	記号	
I短大	英文	96年	1			内容一致文多肢選択	英語一文	NA	英語4択文字のみ	記号
			2			会話完成多肢選択	部分的会話文	NA	英語4択文字のみ	記号
			3			場面想像多肢選択	会話文	NA	英語4択文字のみ	記号
		97年	1			内容一致文多肢選択	会話文	NA	英語4択文字のみ	記号
			2			会話完成多肢選択	部分的会話文	NA	英語4択文字のみ	記号
3			場面想像多肢選択	会話文	NA	英語4択文字のみ	記号			

資料2 表1: 分析A—TEST ORGANIZATION/ INSTRUCTIONS (GENERAL)

rate/class		TEST ORGANIZATION		INSTRUCTIONS	
		salience of parts	sequence of parts	language	channel
0		not salient	random	native	written
1				both	both
2		salient	sequential	target	aural
総計	MEAN	1.78	1.03	0.00	1.12
	%OF 0			100	0
	%OF 1			0	88
	%OF 2			0	13
96年度計	MEAN	1.82	0.95	0.00	1.00
	%OF 0			100	0
	%OF 1			0	100
	%OF 2			0	0
97年度計	MEAN	1.75	1.00	0.00	1.20
	%OF 0			100	0
	%OF 1			0	80
	%OF 2			0	20
4年制大学計	MEAN	1.79	0.99	0.00	1.08
	%OF 0			100	0
	%OF 1			0	92
	%OF 2			0	8
短期大学計	MEAN	1.71	1.24	0.00	1.33
	%OF 0			100	0
	%OF 1			0	67
	%OF 2			0	33
国立大学計	MEAN	1.81	0.75	0.00	1.00
	%OF 0			100	0
	%OF 1			0	100
	%OF 2			0	0
私立大学計	MEAN	1.77	1.13	0.00	1.17
	%OF 0			100	0
	%OF 1			0	83
	%OF 2			0	17

る必要があるだろう。

問題の指示 (Instructions [General]) については、各大学とも日本語で提示されており、またその方法は、1大学1短大 (音声のみ) を除き、音声および問題用紙に印刷されている。

3.2. 分析A (散文) (資料2表2参照)

問題の指示 (Instructions) は各大学とも日本語で行われており、その提示方法は、各大学とも音声を通し、さらに問題用紙にも印刷されている。

問題文 (First Input: Passage) に関しては、その提示回数は各大学とも2回である。問題文の総語数は、全体の平均が143語 (最大222語, 最小94語) であり、Bachman et al. (1995) の調査における TOEFL の語数の平均 (159.50語) に比べると少ない (-16.50語)。しかし、国立大学 (172語) はその語数を上回っている (+12.50語)。また4年制大学の方が短大よりも語数は

資料2 表2: 分析A—散文

		INSTRUCTIONS (PROSE)		FIRST INPUT (PROSE)									SECOND INPUT (PROSE)					THIRD INPUT (PROSE)				
		language	channel	Format	Nature of Language									Format		Nature of Language			Format		Nature of Language	
rate/class				# of times of presentation	# of words	vocabulary	speech rate	type of information	topic/style/genre				channel of presentation	# of times of presentation	# of words	vocabulary	speech rate	channel of presentation	# of times of presentation	length	vocabulary	
0		native	written					concrete	native	casual	familiar	non-explanatory	written			basic		written		≤phrase	basic	
1		both	both						other				both					both		sentence		
2		target	aural					abstract	target	academic	unfamiliar	explanatory	aural			specialized		aural		discourse	specialized	
総計	MEAN	0.00	1.00	2.00	143	0.29	122	0.38	2.00	0.88	1.29	1.71	1.55	1.75	9	0.35	138	0.88	1.25	0.51	0.18	
	%OF 0	100	0						0				11					56		49		
	%OF 1	0	100						0				22					0		51		
	%OF 2	0	0						100				67					44		0		
96年度計	MEAN	0.00	1.00	2.00	152	0.36	130	0.38	2.00	1.04	1.57	1.66	1.66	1.66	10	0.46	149	1.33	1.00	0.53	0.27	
	%OF 0	100	0						0				0					33		47		
	%OF 1	0	100						0				33					0		53		
	%OF 2	0	0						100				67					67		0		
97年度計	MEAN	0.00	1.00	2.00	138	0.26	118	0.38	2.00	0.79	1.15	1.73	1.50	1.80	9	0.29	132	0.66	1.50	0.50	0.14	
	%OF 0	100	0						0				17					67		50		
	%OF 1	0	100						0				17					0		50		
	%OF 2	0	0						100				67					33		0		
4年制大学計	MEAN	0.00	1.00	2.00	153	0.27	122	0.35	2.00	0.96	1.34	1.69	1.66	1.60	9	0.42	144	1.33	1.25	0.45	0.24	
	%OF 0	100	0						0				17					33		54		
	%OF 1	0	100						0				0					0		46		
	%OF 2	0	0						100				83					67		0		
短期大学計	MEAN	0.00	1.00	2.00	121	0.33	122	0.42	2.00	0.71	1.19	1.76	1.33	2.00	8	0.20	128	0.00		0.62	0.08	
	%OF 0	100	0						0				0					100		38		
	%OF 1	0	100						0				67					0		62		
	%OF 2	0	0						100				33					0		0		
国立大学計	MEAN	0.00	1.00	2.00	172	0.30	122	0.46	2.00	1.17	1.42	1.53	1.50	1.33	10	0.41	138	1.50	1.00	0.60	0.34	
	%OF 0	100	0						0				25					25		40		
	%OF 1	0	100						0				0					0		60		
	%OF 2	0	0						100				75					75		0		
私立大学計	MEAN	0.00	1.00	2.00	119	0.29	122	0.31	2.00	0.64	1.18	1.85	1.60	2.00	8	0.30	138	0.40	2.00	0.44	0.06	
	%OF 0	100	0						0				0					80		56		
	%OF 1	0	100						0				40					0		44		
	%OF 2	0	0						100				60					20		0		

多く(+32語)、国立の方が私立よりも多い(+53語)。さらに、96年度と97年度を比較すると、96年度の方が語数は多い(+14語)。語彙の難易度は、全体的に見れば、難易度指数の平均が0.29であり、レベル2以上の語彙が占める割合はあまり高くない。しかし、この難易度指数を基準として各大学のバラツキを見ると、A大学の96年度前期では0.50とかなり難しい語彙が使われている。問題文が読まれる速さは、全体の平均が122 wpmであり、Pimsleur, Hancock and Furey (1977) が提示した Standard Speech Rates⁴⁾ (以下、SSR とする) によると、「遅い (Slow)」であった。96年度と97年度の比較では12語の差があり(96年度130 wpm, 97年度118 wpm)、96年度の方が速い。4年制大学と短大、および国立と私立の比較では全く差はない。最大は145 wpmであったが、最小はF短大の88 wpm(97年度)であり、平均に比べるとかなり遅い。ちなみに、そのF短大の96年度は139 wpmであり、97年度のスピードが極端に落ちていることになる。意図的であるのか、あるいは一貫性がないのか気になるところである。A大学に関しては、96年度、97年度とも安定しており、問題作成者の配慮が感じられる。

問題文の内容 (Type of Information) については、全体的に具体的な内容であるということがわかる(0.38)。96年度および97年度の比較においてはほとんど差がない。なお、Bachman(1990)の分析による TOEFL の平均値は2.00である。また、ほとんどの問題文が英語圏の話題を扱っていると言える(1.90)。問題文の内容が日常的か、学術的かに関しては、全体の平均値は0.88であり、どちらにも偏らず中間値を示している。しかし、A大学の96年度前期とC大学(いずれも国立)は1.42と、より学術的な話題を扱っている。また、そのA大学においては、97年度0.71とかなり日常的な話題へと変化している。なお、Bachman(1990)の分析による TOEFL の平均値は1.17である。さらに、問題文の内容が学習者にとって身近なものであるか否かに関しては、全体の平均値は1.29であり、比較的身近な話題を扱っている。しかし、大学間においてバラツキが見られる。96年度(1.57)と97年度(1.15)の比較では97年度の方がより身近な内容を扱っている。国立(1.42)と私立(1.18)の比較でも同様なことが言えるが、4年制大学(1.34)と短大(1.19)の比較ではその差は小さい。また、A大学においては、96年度1.42(前期)および2.00(後期)であったが、97年度は0.71とかなり身近な話題を扱っている。最後に、問題文は概して説明調で与えられていることが分かる(1.71)。しかし、A大学においては、96年度(前・後期)は1.71であるが、97年度は0.71と大きく下がっている。

質問文 (Second Input) に関しては、大学によってその提示方法は異なり、様々であるが、C大学(問題用紙の印刷のみ)以外は全て音声を通して提示されている。また、F大学においては、音声に加えて問題用紙にも印刷されている。提示回数は、A大学以外は全て2回である。全体の平均語数は9語である。最大は11語、最小は7語であり、全体的にあまり差がない。質問文は端的にということであろうか。語彙の難易度は、全体の平均値が0.35とかなり基本的な語彙であることを示している。しかしながら、H大学の0.10からD大学の0.80まで多少のバラツキが見られる。質問文が読まれる速さは、全体の平均が138 wpmであり、SSRによると、「やや遅い (Moderately Slow)」であった。テスト問題であることを考慮すると、妥当な速さであるかもしれない。しかし、最大158 wpm、最小110 wpmと大学によってかなりの差がある。96年度(149 wpm)と97年度(132 wpm)との差が17語である。4年制大学(144 wpm)と短大(128 wpm)とを比べても16語の差で、同じような差がある。しかし、国立と私立では全く差がない。

選択肢 (Third Input) に関しても、大学によってその提示方法は異なる。選択肢が問題用紙への印刷のみであるが、D大学/短大(97年度)、F短大(96年度および97年度)、E短大および

C大学（97年度）で、音声のみがA大学（96年度前・後期および97年度）とH大学であった。その提示回数は、音声のみのA大学（96年度前・後期および97年度）は1回、H大学は2回であった。また、選択肢における談話レベルの文は皆無であり、全体の平均値は0.51であった。これは文またはフレーズレベルの選択肢がほぼ同じ割合で現れていることを示している。語彙は、全体の平均値が0.18と基本的な語彙であることを示している。

3.3. 分析A（会話文）（資料2表3参照）

問題の指示（Instructions）は各大学とも日本語で行なわれている。その提示方法は、E大学が音声のみによる指示で、他の大学および短大は、音声に加えて問題用紙にも印刷されている。

問題文（First Input: Passage）に関しては、その提示回数は、散文と同様に、各大学とも2回である。問題文の総語数は、全体の平均が120語（最大443語、最小23語）であり、大学間でかなりバラツキがみられる。96年度（160語）の方が97年度（98語）に比べて、62語も多く、4年制大学（130語）は短大（95語）より35語多い。語彙の難易度は、0.16であり、レベル2以上の語彙が占める割合が低く、ほぼ中学レベル程度の語彙が中心である。大学によるバラツキ（最大0.26、最小0.1）は多少みられるが、年度や4年制大学・短大の区分による偏りはあまりみられない。問題文が読まれる速さは、全体の平均が142 wpmであり、SSRによると、「やや遅い（Moderately Slow）」であった。96年度（134 wpm）は97年度（147 wpm）より13語遅く、4年制大学（147 wpm）は短大（128 wpm）より19語速い。問題文の内容（Type of Information）については、概して具体的な内容であるということがわかる（0.14）。また、ほとんど全ての問題文が、日本と英語圏で共通に起こりうる、日常的で、身近な内容のものを扱っている。

質問文（Second Input）に関しては、F短大は、音声に加えて問題用紙にも印刷されているが、他の大学や短大は音声のみである。提示回数は、全て2回である。語数の最大は9.6語、最小は6.25語であり、全体的にあまりバラツキがない。語彙の難易度は、0.13とかなり基本的な語彙が用いられていることを示しているが、F大学の97年度（英文）は0.71と突出している。質問文が読まれる速さは、平均が147 wpmとFirst Inputと同じ値である。その中で、E大学が233 wpmとかなり早く、同大学のFirst Inputの166 wpmと比べるとかなりの差がみられる。

選択肢（Third Input）は、全ての大学および短大で、問題用紙に印刷されており、その長さは文レベル以下で、それ以上のレベル（談話）になるものは1.8%と極めて少ない。選択肢の語彙は、0.10と基本的なものをを用いている。

3.4. 分析B（資料2表4・表5参照）

Dictation（Partial Dictationを含む）または真偽判断を採用した大学はそれぞれ2校ずつと少ない。

まずDictationについてみると、問題の指示（Instructions）は各大学において問題用紙に印刷され、日本語で行なわれており、かつ、音声で提示されている。問題文はまとまりのある内容を聞かせ、全体又は一部を書き取らせる形式になっている。問題は全て3回読まれている。問題文が読まれる速さは一回目の平均がSSRに従うと「遅い（Slow）」（115 wpm）である。A大学の場合、話し手の違いによると思われるが、96年度前期（145 wpm）と同年後期（67 wpm）の間にかかなりの差が見られる。問題文の文化背景に関しては多様であり、サンプルが少ないこともあって、傾向は特定できない。しかしながら、問題文（Type of Information）の内容については概して具

資料2 表3：分析A—会話文

		INSTRUCTIONS (PROSE)		FIRST INPUT (PROSE)								SECOND INPUT (PROSE)				THIRD INPUT (PROSE)				
		language	channel	Format	Nature of Language				Nature of Language				Format	Nature of Language			Format	Nature of Language		
rate/class				# of times of presentation	# of words	vocabulary	speech rate	type of information		topic/style/genre	channel of presentation	# of times of presentation	# of words	vocabulary	speech rate	channel of presentation	# of times of presentation	length	vocabulary	
0	native	written						concrete	native	casual	familiar	written				written		≤phrase	basic	
1	both	both							other			both				both		sentence		
2	target	aural						abstract	target	academic	unfamiliar	aural				aural		discourse	specialized	
総計	MEAN	0.00	1.09	2.00	120	0.16	142	0.14	1.09	0.22	0.42	1.81	2.00	7	0.13	147	0.00	0.60	0.10	
	%OF 0	100	0							7				0				100	41	
	%OF 1	0	91							77				18				0	57	
	%OF 2	0	9							16				82				0	2	
96年度計	MEAN	0.00	1.00	2.00	160	0.16	134	0.21	1.25	0.18	0.50	1.75	2.00	7	0.05	144	0.00	0.80	0.07	
	%OF 0	100	0							0				0				100	24	
	%OF 1	0	100							75				25				0	71	
	%OF 2	0	0							25				75				0	5	
97年度計	MEAN	0.00	1.14	2.00	98	0.17	147	0.10	1.00	0.25	0.38	1.85	2.00	7	0.18	149	0.00	0.49	0.12	
	%OF 0	100	0							11				0				100	51	
	%OF 1	0	86							79				14				0	49	
	%OF 2	0	14							11				86				0	0	
4年制大学計	MEAN	0.00	1.12	2.00	130	0.17	147	0.16	1.00	0.21	0.37	2.00	2.00	7	0.15	155	0.00	0.73	0.07	
	%OF 0	100	0							6				0				100	27	
	%OF 1	0	88							88				0				0	73	
	%OF 2	0	13							6				100				0	0	
短期大学計	MEAN	0.00	1.00	2.00	95	0.14	128	0.10	1.33	0.26	0.55	1.33	2.00	7	0.10	128	0.00	0.26	0.19	
	%OF 0	100	0							8				0				100	80	
	%OF 1	0	100							50				67				0	13	
	%OF 2	0	0							42				33				0	7	

資料2 表4：分析B—Dictation

		INSTRUCTIONS		FIRST INPUT (DICTATION)								
				Format	Nature of Language							
rate/class	language	channel	# times of presen	# of words	vocabulary	speech rate	type of information	topic/style/genre				
0	native	written					concrete	native	casual	familiar	non-explanatory	
1	both	both						other				
2	target	aural					abstract	target	academic	unfamiliar	explanatory	
総計	MEAN	0.00	1.00	3.00	79	0.24	115	0.28	1.00	0.40	0.71	0.77
	%OF 0	100	0						20			
	%OF 1	0	100						60			
	%of 2	0	0						20			

資料2 表5：分析B—真偽判断

		INSTRUCTIONS		FIRST INPUT (T/F)								
				Format	Nature of Language							
rate/class	language	channel	# times of presen	# of words	vocabulary	speech rate	type of information	topic/style/genre				
0	native	written					concrete	native	casual	familiar	non-explanatory	
1	both	both						other				
2	target	aural					abstract	target	academic	unfamiliar	explanatory	
総計	MEAN	0.00	1.00	2.00	210	0.24	125	0.20	1.60	0.39	0.68	1.07
	%OF 0	100	0						20			
	%OF 1	0	100						60			
	%of 2	0	0						20			

体的である(0.28)。話題(Topic)は日常的で、学習者にとって比較的身近な話題である(0.71)。問題文が説明調であるか否かに関しては、大学間の差が大きく一概にどちらとも言えない(0.77)。

真偽判断についてみると問題の指示(Instructions)はDictationと同様全て日本語で行なわれ、各大学において問題用紙に印刷され、かつ音声で提示されている。問題文は各大学で2回読まれている。問題文の総語数は他の出題形式より多く(210語)、あまり難解な語彙は使われていない(0.24)。第1回目に問題文が読まれた速さはSSRでは「遅い(Slow)」である(125wpm)。年度により差が目立つ大学(F大学96年度/97年度)もみられる。問題文の内容(Type of Information)については総じて具体的であり(0.20)、日常的なものが多く学習者に身近な話題が多い。しかし、E大学(ロシア語)のように1.14と身近でないケースもある。今回の問題文には日本独特な文化を扱ったものはみられない。説明調であるか否かに関しては中間的な数値が平均として出ているが、大学間あるいは年度によりかなりの差がみられるのも事実である。特に問題文の読まれる速さについては同じ大学でもあまり大きな差があるのは望ましくないであろう。問題作成者の配慮が求められる。

4. まとめ

本研究にて作成された評価基準表を用いて、北海道内9大学の大学入学試験を調査、分析することにより、テスト問題の全体の構成について、必ずしも問題の難易度を考慮した出題形式にはなっていないことがわかった。また、問題の内容も、散文においては、より学術的な話題を扱い、

決して身近な話題だけに終わっていないことから、学習者にとっては比較的難しいのではないかとと思われる。

96年度と97年度を比較⁵⁾すると、リスニング・テストの形式およびその内容には、問題文の語数と語彙の難易度を除いて、大きな変化は見られず、「オーラル・コミュニケーション」の導入はテストの形式・内容に大きく影響を及ぼさなかったと言える。なお、本研究において特記すべき点は以下の通りである。

1. 散文については、学習者にとって身近な話題というよりは、学術的な内容を扱う傾向が強い（資料3図1参照）。語彙レベルも比較的難易度の高い指数を示している（資料3図4参照）ため、最も難しい問題と言える。
2. Dictationの問題文の語数が比較的少ない理由は問題文の読まれる回数が散文、会話文と比べて多いためであると考えられる。散文、会話文が2回読まれるのに対し、Dictationは「書かせる」問題のため3回読まれている（資料3図2参照）。
3. 真偽判断の問題文の語数はTOEFLの語数より多い（資料3図2参照）。しかし、その内容はより日常的で身近な話題が扱われている（資料3図1参照）。

資料3

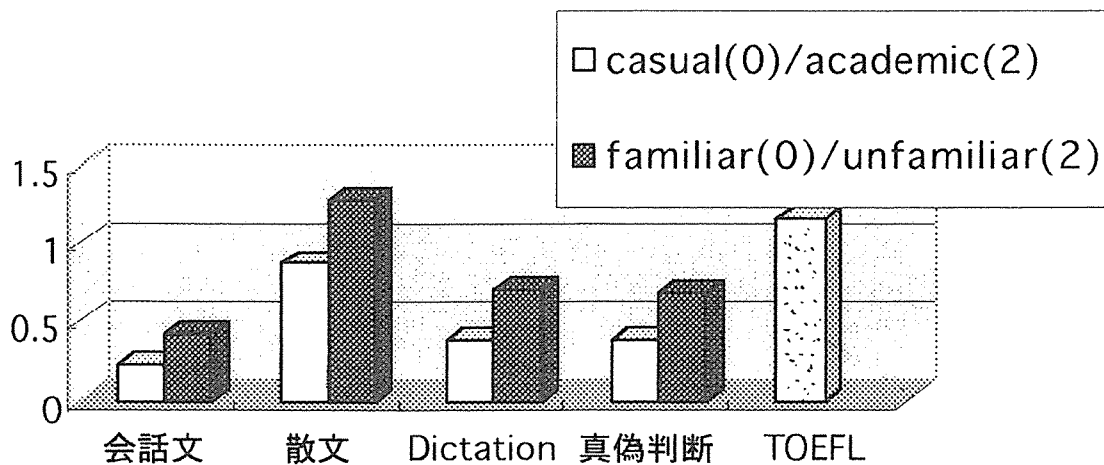


図1 Topic/style/genre

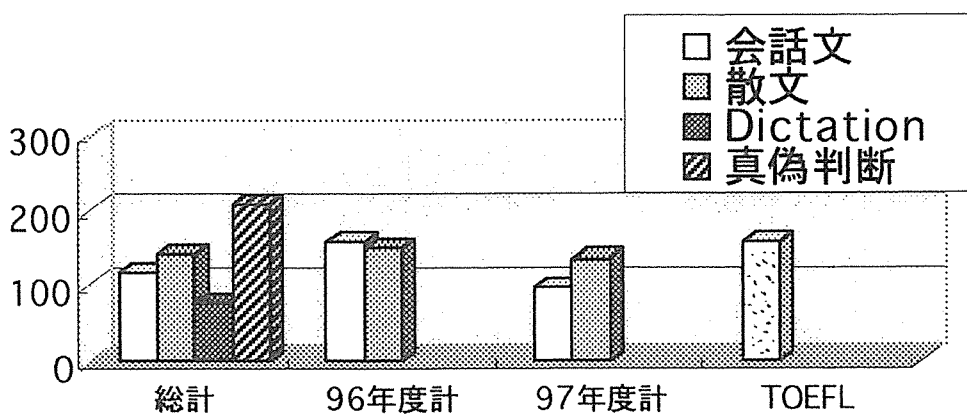


図2 Number of Words

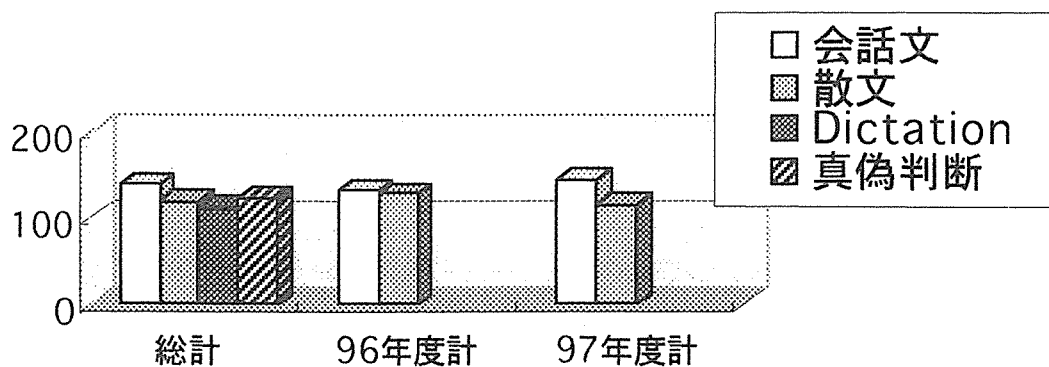


図3 Speech Rate

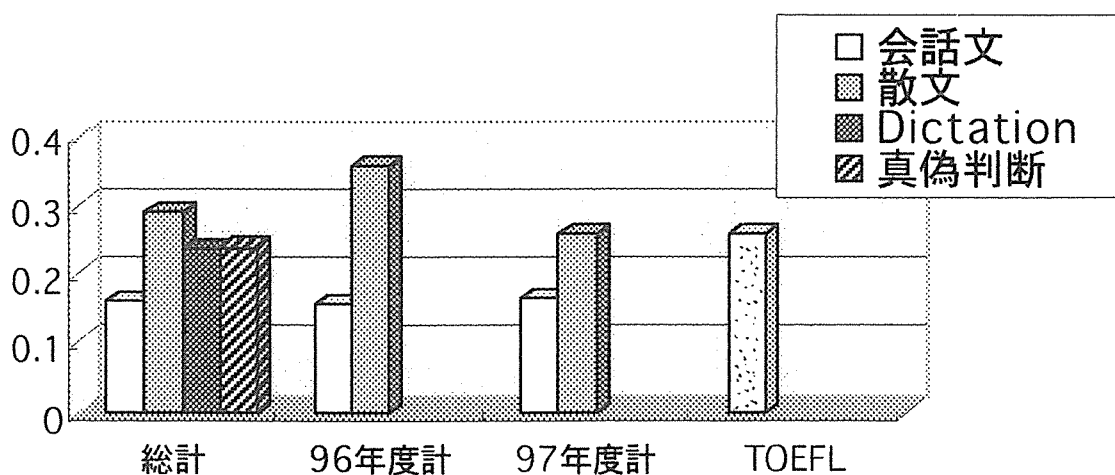


図4 Vocabulary

4. 散文も会話文も97年度には、問題文の語数が減少している。特に、会話文の語数は約39%減少した(資料3図2参照)。
5. 会話文は96年度と97年度の比較において語彙レベルの難易度指数に大きな差は見られないが、96年度と比べると97年度の散文では低い難易度指数を示している(資料3図4参照)。
6. Speech Rateについては、散文、会話文、Dictation、および真偽判断において、SSRの「平均」と比べると、かなり遅いことがわかる。また、散文と会話文の96年度と97年度の比較では殆ど差はない(資料3図3参照)。

今後の課題として、本研究で示した評価基準表を基に、リスニングにおけるコミュニケーション能力も含めた基準表を作成し、さらに広範囲な分析を行い、大学入学試験リスニング問題の改善に寄与すべき基礎データを提示してゆきたい。

註

* 本研究は大学英語教育学会の補助費を受けて、CCR研究会(代表:高井收)のメンバーによって行われたものである。

1) 問題文に使用された語彙の難易度を示すために、以下の難易度指数(0~4)を用いた。難易度=(レベル2

の語数×1+レベル3の語数×2+レベル4の語数×3+レベル5の語数×4)/総語数。語彙のレベル分けに関しては、園田(1996)に基づいて作成された Hokkaido University English Vocabulary List (1995) を基に、レベル1を「中学必修語彙 772 語」、レベル2を「高校必修語彙 1780 語」、レベル3を「大学受験語彙 2042 語」、レベル4を「大学基本語彙 1523 語」、そしてレベル5を「大学発展語彙 1303 語」とした。問題文の語彙の難易度についてはこの指数を用いたが、質問文、選択肢の語彙の難易度については、総語数が少ないため、評価者による主観的な3段階評価を行った。

2) 1分間あたりの語数

3) 話題が帰属する文化圏(Native/Others/Target)については、分類わけの項目であるが、主観的評価として扱った。

4) Pimsleur, P., C. Hancock and P. Furey (1977) は Speech Rate に関して次のような基準を提示している (Standard Speech Rate):

Fast = above 220 wpm

Moderately Fast = 190 to 220 wpm

Average = 160 to 190 wpm

Moderately Slow = 130 to 160 wpm

Slow = below 130 wpm

5) リスニング問題の96年度と97年度の比較は散文と会話文のみとした。その他の問題については、データ数が不十分のため年度比較はできなかった。

参考文献

- 小池生夫 (1988) 「早期教育・中学校・高等学校の英語教育における実態と将来像の総合研究」昭和61・62年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書
- 西堀ゆり他 (1993) 「全道大学英语教育の実態調査―道内12大学4年目アンケート調査を踏まえて―」『言語文化部研究報告叢書』, 札幌: 北海道大学言語文化部
- 園田勝英 (1996) 「大学生用英語語彙表のための基礎研究」『言語文化部研究報告叢書7』, 札幌: 北海道大学言語文化部
- Bachman, L.F. (1990) *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Bachman, L.F., Davidson, F., Ryan, K. & Choi, I. (1995) *Studies in Language Testing 1-An investigation into the comparability of two tests of English as a foreign language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- English Department. (1995) *Hokkaido University English Vocabulary List*. Sapporo: Institute of Language and Culture Studies.
- Pimsleur, P., Hancock C. & Furey P. (1977) "Speech Rate and Listening Comprehension," In Burt, M., Dulay H. and Finocchiaro M. (Eds.) *Viewpoints on English as a Second Language*. New York: Regents, 27-34.